

教会の七つの柱⑤ —— 賛美（礼拝）

そして、毎日ひたすら心を一つにして神殿に集まり、家ではパンを裂き、喜びと真心をもって食事を共にし、神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加えてくださったのである。（使徒 2:46-47）

全地よ、主に向かって喜びの声を上げよ。喜びながら主に仕えよ。喜び歌いつつその前に進み出よ。主こそ神と知れ。主が私たちを造られた。私たちは主のもの。主の民、その牧場の羊。感謝して主の門に進み、賛美しつつ主の庭に入れ。主に感謝し、その名をほめたたえよ。主は恵み深く、主の慈しみはとこしえに。そのまことは代々に及ぶ。（詩編 100 編）

賛美は教会の表情であり、信仰の呼吸です。賛美が絶えるとき、教会は喜びを失います。しかし、神を賛美している群れは、どんな状況の中でも希望を放ちます。詩編100編は、神を礼拝する者たちの喜びを歌っています。「全地よ、主に向かって喜びの声を上げよ」「感謝して主の門に進み、賛美しつつ主の庭に入れ」。そこには、感情を超えた信仰の喜びが溢れています。

賛美は、単なる音楽活動ではありません。それは「神を覚える心の姿勢」です。苦しみの中でも神を賛美できる——そこに真の礼拝があります。パウロとシラスは、ピリピの牢獄の中で鎖につながれながらも、真夜中に「賛美の歌を歌って祈っていた」（使徒16:25）と記されています。そのとき大地が揺れ、牢の戸が開いたとあります。賛美は閉ざされた場所に光をもたらす力を持っているのです。

賛美の心は、喜びの時にも苦難の時にも変わることがありません。それは、状況ではなく、神ご自身に根ざしているからです。神は常に善であり、真実であり、変わることはないお方です。だからこそ、どんな時にも「主に感謝し、その名をほめたたえよ」と詩編は歌うのです。教会が賛美する群れであるということは、「神を喜びとする群れ」であるということです。礼拝とは、音楽や形式ではなく、神の前に心を開き、感謝を捧げること。そのとき、主の喜びが教会全体に広がっていきます。

私たちの教会も、賛美によって整えられていきたい。それは上手に歌うことではなく、心から神をあがめることです。困難の中でも賛美を選び取るとき、神はその歌声を通して働かれます。賛美こそ、教会の力であり、証です。

分かち合いの問い

- ① 最近、心から賛美できた瞬間はどんなときでしたか？
- ② 苦しい状況の中でも賛美をささげるとは、どんな意味があると思いますか？